



# 妙たえ の光ひかり

通刊27号 復刊2号

1991年6月30日(季刊)

角田山妙光寺 発行  
新潟県西蒲原郡巻町  
角田浜

〒953 ☎0256-77-2025

## 境内に住むムササビ

夜になるとギャーギャーと鳴いて木から木へと滑空して渡り歩くムササビ。大きさは小型の猫ほどで、その顔姿は実に愛くるしい。夜行性で、昼間は松やケヤキ等のキツツキがあげた穴を寝ぐらにして休んでいる。夕方ほの暗くなった頃、穴から出てきて枝の上でしばしあたりをうかがってから、山の方にエサを求めて出かけて行く。この時が一番観察しやすい。エサは木の新芽や木の実とか。

妙光寺の境内には専門家の観察で五、六頭いるらしい。昨年の夏の夜、一度に三頭が飛び交びかったこともある。山に近い人里に住み、高木のある神社や寺に多いとのこと。

この写真は六月初めの朝、夜遊びが過ぎて単に帰りそこなったのか、玄関前の木の下で寝ているところを見つけ、カメラを取りに行っている間にやっと自分で三メートル程登ったところ。

## 韓国の花祭りに詣でて

小川英爾

五月末韓国を旅する機会を得た。三年前に古墳巡りをしたのに次いで二回目。今回は旧暦で行われる花祭り（お釈迦様の誕生祭）に誘われたのと、石仏を拝見するのが目的。同行者は安穩廟設計者の野沢先生ご夫妻と、韓国墓事情取材を兼ねた井上治代さん（ルポライター）。私の友人でソウルで画廊を営むさんが案内して下さる。

新瀉からわずか二時間、ソウルで合流して一泊。翌朝列車で光州に向かい昼過ぎに着いて郊外の雲住寺へ。正確には雲住寺跡が正しい。その昔村人達が村の安全祈願のために、一夜にして千体の石仏、千基の仏塔を建てたと伝えられている。しかしこれまでに相当数が持ち去られて、七十の石仏、十八の仏塔が素朴な姿を、谷合いの山中に残しているに過ぎないが、それでも十メートル近い石仏、石塔は見事。七年前から一人の尼僧が寺の復興を目指して、最近小さな本堂と庫裡を建て信者を迎えているという。この日が花祭り、祭日で大勢の信者や観光客が参詣し、奉納された紙製の燈籠が広い境内一ぱいにつるされている。本堂の前では野菜料理とご飯のおとぎが常時ふるまわれている。本堂の中では中年以上の女性が思い思いに花、果物、菓子、餅、米等を仏前に供えて拝み、そして談笑している。さらにその人達を世話する信者がいるなど、妙光寺の祭礼の風景と全く変わらない。間に入って話を聞くと、離れて暮らす子や孫の無事を祈っているとのこと。

午後の法要に同席させていただいた後、庫裡に招かれた。韓国に檀家制度はなく、全てが信者の寄進

で復興は大変。また仏教僧は結婚せず、亡くなるとその遺骨は自然の中に撒かれるという話には身が引き締まる思いであった。夜、光州博物館の朴先生のお話を伺い、翌日同じ光州郊外仏巖寺を訪ね、夕刻ソウルに戻る。

四日目、中央博物館見学の後、午後より弘益美術大学教授で韓国彫刻界の第一人者、田礪鎮先生宅を訪問。六十二歳とは思えない若々しさと、かざらない気さくなお人柄で、暑いからと早速ビールでもてなされた。ぬるいビールをどんどん持ってこられるおおらかさがうれしかった。先生の彫刻は童心的形象と評され、子供や母子、動物を扱ったほのぼのとする作品が多い。釜山の市長に依頼されて自殺の名所に建てた母子像が、有名になって新婚旅行の名所に変わったという。

熱心な仏教信者という先生とすっかり意気投合した私は、引き止められるままに大好きで聞き過ぎたためという、伸びきった日本民謡のテープをバックにご馳走になった。お礼に新しいテープをお贈りしますという私の言葉に、先生は「これをくれた神戸大学の先生の恩を忘れたくないから、これより高価なテープは困る。なれば同じ物を」とおっしゃった。話の中で先生が現在完成ま近の作品の石仏、快心の作でぜひ日本の寺院に安置して欲しいのだが妙光寺ではどうかということになった。これは国立光州博物館所蔵で高麗時代の石仏を、政府の特別許可で一刀三礼原寸複製した作品。私としては高価な品だし御縁があればと申し上げたが、確かにすばらしいお顔立ちであった。

その夜は、ソウル大学名誉教授の兪先生にお会いするなど、行く先々で中身の濃いお話を伺い、短期間ではあったが、花祭りを通して日本仏教とは異なりを見せる韓国の仏教、そして儒教文化の一端をかい間見ることができた。彫刻家の田先生には近々新しい民謡テープをお送りするが、作品の石仏の方は私のへそくりごときでは手がとどきそうにない。

## 信心

# 金婚式記念に金丸を寄進

## 内藤喜作・シズ夫妻

巻町十区の内藤喜作さん(70歳)、シズさん(73歳)夫妻は、屋号をイクタロサ、通称タマゴヤあるいはコメヤと町の人々から呼ばれ、親しまれている。

二人が結婚した頃の家業が米屋、その後卵と飼料の販売を長年続け、現在は長男夫婦が焼鳥中心の飲食店を始めたため、孫の子守りと老人クラブ会長等、地区の用を引き受けている。

先代の幾太郎さんがとても信心家で、巻講中のまとめ役や妙光寺の世話人を熱心に務めた人だった。その幾太郎さんが昭和三十四年に亡くなり、喜作さんが世話人を引き継いでから三十三年、生真面目に努めてこられた。一方シズさんも現在巻講中二十五人の中の古参

の一人として、明るく皆をリードする元氣者。シズさんの行くところ笑い声がたえない。

二人は昨年金婚式を迎え、その記念に金丸一式(直径51センチの特級品)を奉納された。「これまでの金丸が古くて痛んで音も悪く、お寺参りのたびに気になっていた。結婚して五十年、二人とも大病することもなくこれまで生かしてもらったのも、仏様のおかげかと思うとありがたくて。俺の兵隊恩給とバサ(婆さん)の年金を溜めたのを出し合って上げさせてもらいました。」と喜作さん。

金婚式のお祝いは今年八月、幾太郎さんの三十三回忌とつれあいの婆ちゃ

んの五十回忌の法事るとき、小じんまりとやってもらうとか。「子供が小さいときはお参りも十分できなかったが、先代のご前様に講中でお経を習ってからは、毎日夕方にお仏壇参りを欠かさない。それに毎月のお講の集まりと、時々のお寺参りが楽しみ。二人の気持ちが金丸でお寺にいつまでも残ると思うとうれしい。」とシズさん。

ゴーンという重厚な音が、毎日二人の気持ちを代弁して本堂に響いている。





## 寺の動き

### 賑わい見せた「ごはんさま」

四月二十七・八日の妙光寺最大の年中行事「ごはんさま」が今年も六年ぶりに土日当たり、近年になく大勢の参詣者で賑わいました。「ごはんさま」とは、日蓮大聖人が佐渡流罪を赦され鎌倉に戻られる際、これまでのお任せに感謝して、幕府の役人遠藤正遠に授けられた霊山再会のご判(印鑑)を、妙光寺でご開帳する祭礼です。

この行事は三百年以上休むことなく続いていると伝えられ、江戸時代には江戸城大奥や大阪の商人のもとまで出開帳したという記録もあります。昭和三十五年頃までは近郊近在の村や町から、この妙光寺に向かう参詣者の行列が続き、日蓮宗信者の行事というより、この地方一帯の春を告げる祭りとして賑わいました。しかし農作業の時期が

変化したことなどから往時の面影はなく、日取りの変更も言われています。

古来「ごはんさまは必ず晴れる」の言葉通り、二日間とも爽やかな晴天に恵まれ、二十七日夜通しのおこもりには百五十人が、二十八日には稚児、楽人、式衆らの行列について五百人近い参詣者で本堂が埋まりました。午後のご開帳の後、老朽化した祖師堂での法要に参詣者が移動したとき、人数の重みでガクンと床が抜け、一瞬ひやりとしましたが大事には至らずひと安心、胸をなでおろしたことでした。

この日に間に合うようにと、昨年参詣された三重県の近藤さん、佐藤さんご夫妻から、日蓮聖人像に新しいお衣を奉納していただき、お祖師様が一層輝きを増したようです。また今年北

海道、富山、山梨という県外の参詣者の姿が多く目につきました。大勢の参詣者にも事故一つなく、好天のうちの盛儀にひとりひとりのお気持ちが大聖人に届いたことを実感いたしました。丸二日、年番でご苦労いただいた曾根、升瀉、そして地元角田浜の方々にお礼申し上げます。



## 会費のご送金願います

五月に東京からおいででのOさんご夫妻、一人っ子のお嬢さんがアメリカに嫁ぎ、両親のお墓はアメリカで用意するとの話に、「フィリピンへ戦争に行つてやつと日本に帰ってきたのに、

今になってアメリカの土になりたくない。他の墓地のパンフレットも見たがここが一番いいと決めてきた」と明るく語つて下さいました。夏には里帰りするお嬢さん一家とおいでになるそうです。六月現在八十三件のお申込みです。

別紙ご案内の通り、八月二十四・五日に第二回フェスティバル安穩を催します。昨年はお墓をテーマに死後の安心を考えましたが、今年はより良く“生きる”を皆さんで考え、交流する場にしたと考えています。この季節、

晩夏と初秋の境目で日本海の夕日が最も美しいときです。また安穩廟周囲の畑に農事会社のご協力で種取り用の花が栽培され、夏にはお花畑になる予定です。おいでをお待ちしています。

ご契約の際お願いした年間の通信事務費三千五百円を、同封振替用紙でお近くの郵便局からご送金下さい。この中身は文字通り通信事務費ですが、以後名称を“安穩会費”と改めさせていただきます。安穩廟お申込みの方全員を正会員、今すぐ申込みないが連絡をもらったり会合に出たいという方を準会員として、会費は同額とします。今のところ会として組織化するという予定はなく、あくまでも事務の便宜上ということですのでご了解下さい。

準会員の方は現在二十六名いらっしゃいます。

が、会費のご送金の有無によって継続の意思を確認いたしますので、退会もご自由です。他に安穩廟や会の運営のために知恵をお出し下さる方若干名を、名誉会員とさせていただきます。現在、野沢清さん(設計者)、井上治代さん(ルポライター)、内藤正敏さん(写真家)らです。

これまでに墓碑名の刻字をお申込みの方の分、全て八月十日までに完了しますのでその際ご連絡いたします。



## 寺庭から

# お寺とラジカセ

結婚する時に持ってきたラジカセが壊れた。修理してもすぐに調子が悪くなるので思いきって新しい物を買ったのだが、CDとリモコンがついていて古いものと比べるとその技術の進歩には驚いてしまう。

縁あって小川という古いお寺の住みたら、妙光寺という古いお寺の住職で、私といえばおよそお寺には不釣り合いな小娘で、ごぜんさまは苦労していると思うのだが、右往左往しているうちに気がついたら八年も経っている。初めて妙光寺に来た時、客殿の新しい建物に目を奪われた。お天気のよい日で外の明るさと中のほの暗さのバランスが建物をと

ても美しく見せてくれた。そしてもっと凄いのは日常的に二百七十年も経っている建物をなんのためらいもなく使いこなしているということだ。今でも時々本堂の柱をなでながら物思いにふけることがある。長い年月の間に何を見てきたのだろうか。

私にとつて八年は短い人生の中のさらに短い時間であるが、転機ともいえる決定的な期間であった。「もう後へは引けない」という思いで淋しくなることもある。そんなとき妙光寺の経てきた悠久の時間になぐさめられるのである。実際本堂の片隅に座って天井のシミや柱のキズを見

ていると想像は江戸時代までさかのぼり、ちょんまげ姿のおじさんが見えてくる。生きて、死んで、生きて、死んで、皆同じだ。

技術がどんなに進歩しようが、ラジカセで聞く音楽にはかわりが無い。重要なのは新しいラジカセを持つことではなくて、青春時代の古いテープを聞くことなのだから。お寺での生活で、富とか名誉とかを求め、心をまったく無くしてしまった。死んで残るものは、お金ではなく人の心、思い出として静かに歴史の中に溶け込みたい、と思う。

でも生活は楽しいほうがいい。今日も夏の休暇をめぐり夫婦げんかである。  
(小川なぎさ)



## 行事案内

七月四日～十六日 東京方面お盆棚経

例年通りに住職がお伺いします。

八月一日(木)

お盆墓参り、施餓鬼法要

午前5時半 墓経受付開始

〃 10時半 安穩廟法要

〃 11時 施餓鬼法要

昼 12時 おとき

午後1時 説教

年々墓参りの集中する時間が遅くなって混雑します。なるべく早めにお出かけください。

各地区世話人の方が七月中に、護持会費のお願いと施餓鬼塔婆の受付に伺います。新潟市内始め遠方の方は郵送でご案内しますので、塔婆は七月中にお申込みの上、八月一日または後日、護持会費とともにお納め下さい。

八月十三日～十六日 お盆棚経

例年の通り、住職とお手伝いの東京からのお上人が手わけして全檀家に伺います。

八月十九日(月)

岩屋七面宮祭礼

午前10時半 本堂で法要・お加持

続いて岩屋へ移動、法要

昼 12時 おときはありませんが

参詣者全員に赤飯を供養

午後1時 説教

八月二十四・五日(土・日)

第二回フェスティバル安穩

昨年から安穩廟の供養祭。詳しくは案内書がありますのでそちらで。

九月二十三日(月)

秋のお彼岸中日法要

午前11時 秋季彼岸会法要

おとき、説教あります。

あとがき



復刊第二号をお届けします。仲々先代住職のような中身のある文章が書けず、四苦八苦しています。継続させるためにもかたひじを張らずにと、今回は韓国紀行文にいたしました。この『妙の光』、実は先代住職が三十代に始めて三号で休止、四号が出たのが六十歳を過ぎてからでした。それ程継続は大変ですが、他のご住職で頑張っておられる方も多く、交換もしていますので励まされます。本誌のお代をご心配下さる方がありますが、印刷代は安穩廟事務費の一部から、送料は護持会費から出ていますのでご安心下さい。暑い夏が来ますが、元気で過ごして下さいますように。

(小川)